



大器必深沈大才必



靜至少年最當戒

浮躁與放縱

敬字直直



明治二十五年七月一日印刷
明治二十五年七月二日出版

正價金五拾錢

版權
所有

編述者 下野 遠光

編述者 山崎 庚午郎

發行兼
印刷者 大橋 新太郎

日本橋區本石町三丁目十六番地

東京日本橋區本石町三丁目

發兌書林
博文館

は し か き

しら玉、眞玉、くさくの玉、いはつとへ
に集へたらむは、一ッの玉乃色にもまさ
りて、人のめつるゝ世の常の理りなれと、
いゝにくさくの玉ならんも、世にちり
はひて、おゝゝしここにうつもれあんには、
また一つの玉の光りのあらはれたらん
よはしゝしとそおもふ、さるをもし一法

の玉にして、いろ／＼の玉の光をあつめて、くさ／＼の寶をつとへたらんにもまされる玉あらは、いかに人々の喜ひ免つる事の多からんは、いはてもしるき事そかし、此頃、吾友の下野山崎の兩君はも、其物學ひのいとまに、世にちりはひたるくさ／＼の玉を、神つとへにつとへなして、一つの眞玉なま書をよそ作り出され

たり、これいかにとて見せられしまゝに、
老の眼を打開た見るに、古へ今にたから
なす文ともの中く、に世に埋れたるを
もかたいて、たくひをわかち、光をそ
へつゝ、かゝやかぬかたもなく、てらさ
ぬくまのなく、みかきなされしおそ、い
ともく愛たき神寶ともいふべかりけ
れ、かゝるめてたき玉の世にいてくるに

つきて、猶世の年わかき人々にも、も
てはやされてんとて、老のくり言打返し
つゝ、かくい言舉しつるに、なん、小石川
の清き流れの硯に写けて、つたなき水莖
の跡をとゝむるものは、六十六歳の翁、
内藤のますく、

日本文學集覽序

近來國學盛興。中小公私之黌。概編之教科。而見其教科。則不過語學文章二科。然則是國學之枝葉而已。國學之根幹者何。即歷史法制也。抑各黌教科。非無歷史。然歷史之科。並肩於萬國歷史。無有內外辨。歷史知建國之基礎。祖先之履歷。法制知政治

之沿革。則國學者。宜以爲教科之綱領也。是予所以謂諸覺教科。未過爲國學之枝葉也。頃日文科大學生下野遠光山崎庚午郎二君。以修學餘暇著書。名曰本文學集覽。來求予序。予受而閱之。分類爲和文、和歌、國史、法制。又分之爲沿革、教草。而書中舉者。悉採先哲學說。不敢加一己私意。

夫近來少解文字者。動輒剽竊人說。妄役活字問世。自稱大家先生者。天下皆是。而其書見新聞廣告者。恰如雨後松蕈。二君之著。提舉國學之枝葉根幹。能得其要矣。國學之針路。由是可知。國學之全体。由是可見。而著述用意。自見學生慎重之体面。若夫二君卒業。益進著書。以戒世輕薄者。

予寧爲國家賀焉。不獨爲二君也。

明治廿五年六月廿五日

增田于信撰

凡 例

一 此書、名けて日本文學集覽といふ、されど、全く我國文學の全体を集めたりといふにあらず、畧ば其大要を集め、以て後進少年の覽に供せんとしたるものあり、

一 近來、國文學といふもの、大に勢を得、隨うて其著書も少からずと雖も、徒に詞花言葉を旨とするもの多く、其國體を知り、忠孝の意を喚起せざる如きもの少なり、是れ此書に國史、法制等を編入して、上古より我國風俗習慣等を知らしめ、以て其愛國の志を失せざらんことを望む所以なり、

一 尚、此書の他の著書に異なるところは、毎編に教草といふものを設け、古今名家の高論卓説を掲載し、史により、其由來を知り、教草によりて、其眞味を知らしめんとしたるにあり、其の著書の論を少くしたるは、

或ハ謬劣の説の、讀者を誤らんとを恐れてなり、

一和文史は、和文の沿革を示したるものにて、日本文學の種類、性質等より説き初めて、中古の物語、日記等の類を論述し、延て徳川時代に及び、維新以後を説かざるは、他日をまたんとてなり、

一和歌史に於て、韻文の性質、種類等を述べざるは、紙數の徒に多きは、讀者の倦厭を招かんを恐れ、且つ己に先輩の著書中に論じあればなり、勅撰集を委く掲げたるは、沿革を知るに、尤も緊要なればなり、

一國史要畧、全く其大概を述べたるものは、御歴代、年代要畧及び法制等を參考せよとてなり、

一國史の教草は、有名の戦争、人物等を古史又は名家の論說中より拔萃したるものなり、故に一節毎に其文体に異あるところあり、この却つて、其原本書の文体を知らしめんとてあり、漢文を載せざるハ、日本文學といふ名目あればなり、漢文のもの皆教草にならずといふにハあ

らずかし、

一年代要略は是迄ありつる年契、年表等を參考取捨して、其正確なるものによりたり、書名を掲げたるは、即ち在來のものど異なる點にして、自ら新意の存するところあり、然れども、多忙の間、其杜撰の多きを恐るゝなり、有名附したるものハ、只其頃そのみにて、確ならざるものなり。有名ある本を漏したるハ、今調べつゝあればなり、諸君希くハ他日を待たれよ。

一 法制の沿革を知るに、歴史を讀まざるべからず、其教草に於けるも亦同じ、法律を學ばんものには、此處最も肝要。

一 此書の大體は、右の如くにして、和文、和歌、并に國史、法制等を述べたるものなれば、これによらば、日本文學の一般を知る得るに幾からんが如しと雖も、著者、年若く、學淺く、且つ課業の煩しき身あれば、其根本を忘れて、枝葉を論じ、其門戸を明らめて、堂奥を説かざる類、甚多からんを思ひ、書漸く成りて、顔は紅の如く、汗は泉に似たり、

一世の先輩、幸に著者の志を嘉し、其足らざるところを補ひ、其餘れるを

摘みたまはゞ、著者の幸福、此の上なし、此書を著はす意も、必しも人を教ふるゝあらずして、己の教へらるゝに在ればなり、

附言 校正誤謬の多きは、再版の日をまちて正さんとす、讀者之を諒せよ、

日本文學集覽目次

大畧

第一編 和文

第一章 和文史

日本文學の種類	一
日本文學の性質	三
日本文學の起源(文字有無、外國交通、漢學渡來、佛教渡來)	五
萬葉假名片假名、平假名發明の時代	一二
國文興起の時代(奈良朝の末より平安朝全体)	二三
國文新趣の時代(平安朝の末より鎌倉時代全体)	五三
國文衰弊の時代(南北朝より戰國時代まで)	五五
國文再興の時代	六六
第一和漢混合文	六七
第二純粹和文	七〇
第三俳文及狂文	七三
第四戲曲及小説文	七四
國文學概評	九八

第二章 和文教草

古体中古体及び近体の文	一〇一
假名文起源	一〇二
文章につきて	一〇六
註解書	一〇七
いろは文字	一〇八
古物語	一一〇
物語ふみの詞	一一一
紫式部見解	一一二
史類を讀むに可心得事	一一三
源語	一一四
源語	一一八
源語	一一九
語格の事	一二一
和字正濫要略序	一二二
古言梯の序	一二七
話語指南の序	一二九
かざし抄の序	一三三